

●春日部市民文化講座（第 3 回） 「千利休のわび茶 ～その 3 ー茶室空間に見る『わび』ー」

◆日時：2012 年 11 月 14 日(水) 11 時（ばばら春日部 6 階会議室）～12 時

■日本人の大切にしてきた心情「無常観」

今回は「茶室空間のわび」についてお話をしようと考えています。千利休のわびを考えていく時に、日本人が大切にしてきた心情というものを踏まえなければなりません。それは「無常観」です。絵画、書、文学、雅楽、笛、琵琶、管弦などを通して日本人は花鳥風月、四季を楽しんできました。「わび」を考える時、どうしても京都に行き着くのです。先日、京都の下鴨神社で鴨長明(1155-1216 年)の「方丈記 800 年展」が開催されており行ってまいりました。ちょうど四畳半の方丈の庵(復原された建物、写真)で、中心に囲炉裏があつて草庵風のお茶が楽しめる空間でした。方丈記の時代はちょうど 800 年前、平安時代の末期にあたり、律令制の貴族社会から封建武家社会への過渡期であり、源平の争乱、福原への遷都、平家の滅亡、鎌倉幕府の成立など、まさに動乱の時代でした。そればかりでなく、大地震、辻風、大火、飢餓、盗賊の横行など、様々な天変地異に人々は苦しめられていた時代です。そんな時代にあつて、鴨長明は世捨て人として閑居静寂な生活を求めているのだと感じました。その中に私は「わび」というもの、「無常観」というものを汲み取ることができました。



■西行と世阿弥

鴨長明と同時代の人に西行(1118-1190 年)がいます。西行は、平安時代末期から鎌倉時代初期の武士を捨て、僧侶・歌人として有名な人です。「ねかはくは 花のもとにて 春しなん そのきさらきの 望月のころ」(新古今和歌集)という歌が有名ですが、西行は生前にこの歌を詠み、その歌のとおりお釈迦さんの涅槃の日に入寂したと言われています。これも世捨て人ですね。また、室町時代初期の猿楽師であった世阿弥(1363-1443 年)は、幽玄の世界になるのですが、これは死人の世界、陰陽師の世界になるのですね。

■能にも通じていた千利休

能と利休さんを結びつけるのは、利休の後妻の宗恩が金春流能役者の宮尾道三の娘であり、利休そのものも道三と進行があったことから能とも繋がりが深いものと考えられます。お茶を運ぶときの摺り足は、能の摺り足と同じ運びですね。さらに、作家の三浦綾子さんは「利休とその妻たち」の中で宗恩をキリスト者として描いています。このように利休さんは、能の中にある「わび = 無常観」というものを理解していたのだと思います。

■松尾芭蕉の「無常観 = さび」

「わび = 無常観」、「諸行無常の無常」です。そして文学では「無常 = さび」となります。その代表が傘一つ、杖一つで旅に出た松尾芭蕉(1644-1694 年)です。芭蕉が憧れたのは西行です。ですから、西を目指して旅をしたのです。芭蕉は、千住を旅立つときに「行春や鳥啼魚の目は泪」と詠い、旅に出て会うことの楽しみ、一方で別れることの悲しみをこの句に託したと思います。

■「茶室」もてなしの空間

皆さんが茶を飲んで菓子を食べる「もてなし空間」を今は「茶室」と言いますが、茶の湯が発生した室町時代・桃山時代の頃には「茶室」とは呼んでいませんでした。文献などでも「茶室」という言葉が出てくるのは江戸時代末期から明治時代にかけてなのです。それまでは「座敷」であり、四畳半以下の狭い部屋は「小座敷」、または「囲い」という言葉でも呼ばれているのです。天正元年に利休が高山右近に宛てた伝書があります。その中に、「我が囲い」という言葉を用いているのです。待庵も如庵も「囲い」と記されています。「市中の山居」という言葉があります。これは、これまで失われていた言葉なのですが、イエズス会の宣教師ジョアン・ロドリゲス(1561-1633 年)が記した「日本教会史」の中で、「茶の湯に精通した堺のある人たちは、幾本かの小さな樹木をわざわざ植えて、それに囲まれた、前よりも小さい形で茶の家を造った。そこでは、狭い地所の許す限り、田園にある一軒家の様式をあらわすか、人里離れて住む隠遁者の草庵を真似るかして、自然の事象やその第一義を鑑賞することに専念していた。この都市にあるこれら狭い小家では、たがいに茶に招待しあい、そうすることによって、この都市がその周辺に欠けていた爽やかな隠退の場所の補いをしていた。むしろ、ある点では、彼らはこの様式が純粋な隠退よりもまさると考えていた。というのは、都市そのものの中に隠退所を見出して、楽しんでいたからであって、そのことを彼らの言葉で、市中の山居とっていた」と記しています。宣教師が「東洋のベネチアだ」と発するほど賑わっていた堺の町の中に静寂を求める姿が「市中の山居」にはあったのです。さて、ロドリゲスは「数寄者」が飲み食いする処が「囲い」であり、それに続く露地も含めて「市中の山居」と書いているのです。村田珠光の頃に出現し、武野紹鷗において完成する「わび茶」の原点である四畳半の囲い、これは、足利義政の造った銀閣寺・東山山荘の中にもあります。利休さんは紹鷗に茶の湯を学んだわけですから、この四畳半の囲いで学んでいたのです。

■「わび」は対比の中にある緊張感

「わび」というのは、賑わいの中にある静寂「市中の山居」のように対比の中にある緊張感が大切なのです。つまりコントラストです。茶室で言えば、四畳半よりも大きい広間に対して、四畳半よりも小さい小座敷、それを広間に隣接させて設けることで対比が生まれるのです。小座敷だけでは頼りない建物も、広間に隣接させることで建物も強固になり存在できるのです。そして、四畳半では厳しさが足りないということで、利休さんは天正 5～6 年頃には三畳台目を造り、二畳台目を造るのです。さらに、利休さんは一畳台目（一畳半）の茶室を造り、そこで「おもてなし」をするのですが、それは1対1の真剣勝負なのです。それに耐えられるか、耐えるのが利休さんの使命なのです。表千家の不審菴（ふしんあん、写真）は聚楽屋敷の三畳台目席を写したものです。



■「わび茶」の完成は利休と七哲の力

利休さんは神ではありません。ですから、一人で「わび茶」を完成したのではなく、七哲と言われた高山右近などと相談しながら実験を繰り返して作り上げたのではないかというのが、私の考えです。私が持っている利休さんが七哲の何人かに送った手紙には、今度の囲いには畳を入れようと考えているとか、「待庵」（二畳の茶室、写真）を作る時にも隅炉を造ったとか記されているのです。「待庵」は光秀を討った戦勝記念に、秀吉が利休に命じて、山崎に造らせたもので、京都の利休屋敷に移築され、さらに妙喜庵に移されたと伝えられている国宝の茶室です。この待庵を造るときに、利休は右



近に健在の目利きをさせて、杉丸太6本を送っています。その中の1本を使うという書状も残っています。このように、利休が右近などと相談しながら、実験を重ねて一畳台目の究極の茶室を造ったのだと思うのです。「待庵」というのは、秀吉を待つ庵という意味なのですが、それだけでしょか…？

■待庵と黄金の茶室のコントラスト

「待庵」（二畳）が完成したのに続き、利休が「一畳半」の茶室を造った頃に、「黄金の茶室」（三畳、写真）を完成させます。私は両方の茶室に座らせていただいたことがあります、不思議な感覚なのですね。待庵は室床といって床全体が荒土で塗り込まれていて柱が見えないので広く感じるのです。また、小舞竹を編んだままの窓は和のステンドグラスです。三カ所の窓があるのですが明るくはないのです。そういう厳しい造りなのです。四畳半ではぬるく、びしっとした厳しさが三畳、二畳、そして一畳半と極まっていたのです。二畳の席では、一畳に客、一畳で亭主がもてなす。それを半畳でできるものとしたのです。私は「茶の湯とは死ぬことと生きること」であり、利休さんは自分の葬式をイメージして茶室を造っていたのではないかと思うのです。茶室で最初に炭点前が行われます。炭点前とは、湯の加減を調整してちょうど頃合いが良い時にお茶を差し上げられるようにと教えられたと思うのですが、利休は好んで「灰の花」という言葉を使っていました。灰点前の時に、石灰をまぶした枝炭というものを注ぎます。まさに骨のような形なのですね。「わび茶とは死ぬことと見つけたり」、利休は死をもってもてなしを見つめていたのではないのでしょうか。一畳半の茶室は、生前は利休が客をもてなす場ですが、死して一畳の畳に横たわった利休を客が看取るのが半畳、そこに主客転倒があり、「わびの極め」の幸せ、「無常を超える」ものがあるのです。



■利休の遺偈（ゆいげ）

その思いが「利休遺偈」ではないのでしょうか。「人生七十 力圍希 咄 吾這宝剣 祖仏共殺 提ル我得具足の一太刀 今此時そ天に抛 天正十九仲春 廿五日 利休宗易居士（花押）」【意味：人生ここに七十年、えい、えい、えい（忽然と大悟した時に発する声）。この宝剣で祖師仏陀も我も共に断ち切ろうぞ。私は手慣れた武器である一振りの太刀をひっさげて、今まさに我が身を天になげうつのだ。】と言っているのですが、これは怒り狂っているものなのでしょうか、それとも天に任せようと言っているのでしょうか。利休は、周りが命乞いをするようにと勧めても一切しませんでした。それは無常を受け止めていたからではないのでしょうか。利休の切腹は聚楽亭内の利休屋敷で行われ、検死に立ち会ったのは、利休と茶の湯で親交のあった淡路守だったそうですが、茶を回し飲みしたのちに、利休が切腹、淡路守が介錯したそうです。その時、雷鳴とどろきただならぬ剣幕であったそうです。これは、キリストの死と重なります。我が命を天に委ねた瞬間です。建築家の堀口捨己さんが「待庵」を訪れ涙したと綴っています。「躡り口から覗いた時に背筋から何ものが入ってきて…云々」と…もてなしている側が、もてなされる側になるということを考えさせられる待庵です。

当時は、殴り書きのメモを読み直し、高橋先生の著書をめくりながらの記録を綴らせていただいていたいました。